怪しの熊野

其の十四 「踊り坊主と黒坊主」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

熊野古道、中辺路の道湯川（どうゆかわ）の岩上（岩神）峠には「踊り坊主」という怪異の話がある。岩上峠で歌を歌うと、どこからともなく僧が現れ、狂ったように浮かれ踊るという。これは、狐（きつね）か狸（たぬき）の仕業なのかも知れないし、踊り念仏と関係がある話なのかも知れないが、その正体は定かではない。筆者が出会ってみたい熊野の妖怪の第一位だ。岩上峠は、熊野古道でも特に厳しい難所のため、病気や飢餓で行き倒れる人が多く、その亡霊が旅人に取り憑（つ）く災厄が絶えなかったため蛇形地蔵を建てて安全を祈願した。妖怪ダルが頻繁に出没したともいい、山賊、さらには、湿度の高い山中のため山ビルがとても多かった。あまりにも難所であったため、迂回（うかい）されるようになったことで、世界遺産を整備する際でも、どこに峠があるのか長年わからなかった程だった。そんな場所にいきなり「踊り坊主」が出てきて浮かれ踊ったら「かなり怖い」と思うのは筆者だけだろうか。

熊野古道中辺路の道湯川（どうゆかわ）の岩上（岩神）峠に出没した「踊り坊主」は、どこからともなく現れては、狂ったように浮かれ踊る（イラストはBoBo）

古座川町の七川に出没した「黒坊主」は、背が巨大に伸びる黒い怪物だ（イラストはBoBo）

道湯川は、今では無人となっているが、あまりにも奥地であったため、明治時代には義務教育免除がされていた。見かねた野中の住職が、4年生1名と1年生5名を寺院内に預かり、1カ月1斗1升の米を父兄より受けて養育し、野中小学校へ通わしたという。中辺路では、瀬ノ川でも義務教育免除されていた。この全国でも希な悲惨な状況は20年間以上も解決しなかったことを、大正10年に『紀伊新報』が報道している。野中小学校は近露小学校と合併して近野小学校になったが、現在の集会所の位置にあった。

一方、坊主の名を持つ熊野の怪異ということでは、山中で人間を襲う真っ黒な怪物「黒坊主」がいた。昔、ある者が古座川町の七川で出遭った際には、背丈が3倍ほどに伸び、銃で撃つと、そのたびに背が伸びて何丈もの怪物と化し、逃げ去る時には飛ぶような速さで逃げ去ったという。これも狐か狸の仕業なのかも知れないが、入道雲の化け物だと考える人もいる。確かに、多雨の熊野では、真っ黒な入道雲がいきなり発達し、激しい夕立を降らせることがある。その変わりやすい山の天候は、確かに妖怪の仕業と言いたくなる程。注意が必要だ。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。